
あき

ゆっこ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あき

【Nコード】

N0606D

【作者名】

ゆっこ

【あらすじ】

僕と2個上のはじめての大好きな彼女。いろいろあったけど、今はしあわせです。

はじまり

「ただいま！」

ばたばたと勢いのある音をさせて、きみが帰ってくる。

「おかえり！何してたん？もうすぐごはんできるからお風呂入ってき。」

今日の食事当番は僕だ。というか…週のほとんどが、僕の担当になってしまっ

ている。料理をすること自体が好きだから、ぜんぜん苦にはならないんだけど…。

ぼく達は、僕のいとこを介して知り合った。いとこの友達だった2個上の彼女に勉強を

教えてもらううちにだんだん惹かれていって、人生初の告白をすることになった。

彼女は広島、僕は神戸。顔を見て気持ちを伝えられなかったのはもどかしかったけど、

緊張しすぎて、電話でないと自分から告白なんてできなかったかもしれない。

彼女は僕の精一杯の告白に「ありがとう」と言って、少し笑っているようにも聞こえた。

目がくりくりしていて、赤い眼鏡がよく似合う、僕の大好きな人。

自分の方が年下だから、

彼女を守ってあげるなんておかしいのかもしれないけど、何があったって、彼女の味方で

いようと思ってる。

でも、一度だけ彼氏という立場をやめてしまったことがある。それは彼女が受験に失敗

してしまった時、何も知らずに電話した僕を待っていたのは彼女の

お父さん

だった。

「ゆりは試験に失敗した。あれほど順調だったのに…落ちたのはきみのせいだ。」

君と付き合っていないければ、ゆりは合格できたと思う。もうゆりに連絡をよこさないでくれ。」

頭はまっしろになった。あれほど勉強のできた彼女が…落ちた？信じられなかった。彼女の
お父さんに言われなくても、僕のせいだとか考えられない。試験ぎりぎりまで、彼女は

僕の勉強を電話越しに教えてくれていたから。本当にごめん…何があっても守ってあげようと

思ってたのに、彼女の邪魔をしてしまっていたのは僕自身だった。

抜け殻のようになってしまった僕は、彼女と連絡を取ることをやめた。もう全て忘れてしまおうと

思っていた矢先、彼女から電話があつた。

「どうしたん？せっかく試験終わったのに。」

結果は駄目だったけど…またもう一年頑張るよ。

あきと一緒に勉強するの楽しいから、また一緒に勉強しよ。」

電話の彼女は、いつものように明るくて優しい、僕の好きな人だった。そんな彼女に対して…

僕は「ごめん。もう連絡せんよ。失敗したの僕のせいだろ。この間電話した時、お父さんが

出たんだ。失敗したのは君と付き合っていたせいだって言われた。

これ以上、迷惑かけたくないんよ。」

「何言ってるん…？そんなん私自身のせいに決まってる。あきのせ

いじゃないよ。気にしないで。

もう一年勉強するのだって、これが自分の修行なんやって頑張るよ。

「

「ごめん…もうゆりさんの邪魔するの嫌なんだ。本当にごめん。」

「…そつか。あきの気持ちって、それくらいやったん…？私、悲しいよ…。これからも応援

してくれるって思ってたのに。」

「ごめん…。」

僕は何度ごめんって言っただろう。彼女は泣いていた。今すぐにも抱きしめてあげたい衝動に駆られたけど…僕にその資格はなかった。結局、僕達は一度別れることになった。お互い大好きでもうまくいかないことってあるのだと、僕はこの時初めて知った。

もうこれで全部終わってしまったのだと思っていた。彼女も僕も。別れてから、彼女も必死で勉強してるのなら僕も頑張らねばと、彼女のアシストはなかったけど

一心不乱に勉強していた。というよりも、何もしていないと彼女のことばかり考えてしまうから、勉強に逃げていただけ、とも言えるかもしれない。

お盆に広島に帰省した時も、彼女に会うつもりはなかった。顔を見たら、まだ好きですって

言ってしまいそうな気がしたから。いところにも彼女の近況を聞きたかったけど、聞けなかった。

でも、神戸に帰るその日、彼女に偶然会ってしまった。うだるような暑い夏の日、蝉がミンミン

鳴いてて、かばんが重すぎて手がちぎれそうだと思いながら、家族と一緒に駅まで歩いていた。

見たことがあるような風貌、赤い眼鏡、きれいな長い髪…駅で彼女は誰かを待っていた。

彼女を目にした時、何も考えられなくなった。とりあえず、家族に先に行つてくれと頼んで

重いカバンをぶらさげながら彼女の元まで走っていた。

「どうしたん？」

彼女は驚きながらもいつもの調子で、僕を見て笑っていた。その瞬間、自分でもなんでもそんなこと

したのかわからないけど、彼女を抱き締めていた。もう付き合つてゐるわけでもなんでもないので。

周りの人がびつくりした顔で僕達を見てる。僕にしてみれば、そんなことどうでもよくって

ただただ彼女を離したくなかった。あの時電話で言つた言葉を何度後悔したかわからなくて、

何度も何度も夢で見た。その度に目が覚めて、枕がびっしりと濡れていた。

「ごめん…ごめん…会いたかった」

そんな僕を見て、彼女は泣きながら笑っていた。

「もう…こんなことしたら恥ずかしいよ。大丈夫？私のほうこそごめんね。」

そう言いながら、頭をなでてくれたような気がする。電車の間も迫っていたので、

彼女は僕をなんとか引き剥がして、「絶対また電話するからね。今日はもう帰りね。」と言つて

改札まで送つてくれた。顔が涙でぐしゃぐしゃになっていた僕は、家族にからかわれた後、

電車の中ですやすやと眠った。その日以来、もうあの電話の夢は見なくなっていた。

はじまり（後書き）

この話は、彼と元彼女さんの話を元にさせてもらった話です。別れがあまりにも切なかったので、せめて小説の中だけでも幸せになつて欲しいと思い書きました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0606d/>

あき

2010年12月28日14時23分発行